

雪舟トーク

『雪舟と山口』

講師 毛利博物館館長 白 杵 華 臣（うすき はなおみ）

河上 康子（司会）

「雪舟と山口」と題して白杵先生によりまず雪舟トークを始めさせていただきます。

では、講師の御紹介を山口市企画財政部長本廣隆久が行います。

本廣 隆久（山口市企画財政部長）

それでは、白杵華臣先生の御紹介をさせていただきます。

白杵先生は大正5年に山口市にお生まれになられ、国学院大学国史学科を御卒業の後、三田尻女子高等学校教諭、山口県教育委員会社会教育課課長補佐、山口県立山口博物館館長などを経て、昭和52年より現在に至るまで、お隣の防府市にございます毛利博物館の館長をお務めになっていらっしゃいます。現在、このほかにも山口県文化財保護審議会会長をはじめ、山口県地方史学会会長、山口県自然環境保全審議会委員など、たくさんの要職に就かれ、多方面で御活躍中でございます。

また、「山口県の文化財」「防長の美術と文化」「防長の人と書」など郷土に関する著作も数多く、山口県の芸術文化には特に造詣が深くいらっしゃいます。白杵先生が館長をなさっておられます毛利博物館には皆様もよく御存じのとおり、雪舟の描きました国宝「紙本墨画淡彩四季山水図」がございます。

本会の雪舟サミットに当たりましては、このような御縁で白杵先生に「雪舟と山口」と題しましたお話をお願いいたしております。

それでは、白杵先生よろしく願いいたします。（拍手）

白杵 華臣（毛利博物館館長）

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介をいただきました毛利博物館の白杵でございます。

本日は、雪舟ゆかりの市町の皆様方が、このように御会同になりました席でお話を申し上げる機会を与えられ、大変うれしく光栄に思っております。

今から「雪舟と山口」という題で、山口における雪舟に視点を当ててお話を申し上げますと思います。ちょっと初めにおことわりを申し上げますが、お聞きのように、ちょっと声帯を痛めましたので、声がばらんばらんになりましてお聞き苦しいと思いますが、お許しをいただきたいと思います。

なお、お手元に「雪舟と山口」という略年譜と、それから「大内氏と毛利氏の略系図」を入れてございます。それを御参照になりながら、聞いていただければありがたいと思います。

ここに、お集まりの方は、雪舟がどんなに偉大な世界の画聖であるかということについては、皆さんよく御承知のことだと思っております。しかしながら、実は雪舟の前半生につきま

しては、今のところはっきりしたことがわからないわけでございます。いろいろ研究がなされておりますが、確とはっきりした全半生のことにつままして知ることができない。実は雪舟が歴史の上にはっきりと姿をあらわしますのは、実はこの山口においてでございます。

寛正5年という年であります、幕府の遣いが大内教弘のところへ来る。その案内方々、細川氏の遣いとして東福寺の 之慧鳳という坊さんが山口にやって来ました。その 之慧鳳という坊さんが周防の国を旅行したときの旅の詩文集、「竹居西遊集」という書物があります。その中に初めて雪舟が出てくるわけでございます。 之慧鳳は山口に来ますというと、今、五重塔があります、あそこは今、瑠璃光寺とっておりますが、もともとは大内義弘の菩提寺として香積寺とっております。その塔頭の大蔵院というところに泊まっていたわけですが、ある日のこと、目と鼻の先になります七尾山の南麓、雲谷庵に雪舟を尋ねて行きました。そのときのことを書きとめておるわけですね。それによりますと、雪舟と10年ぶりの久濶を叙したと、書いています。10年ぶりといひますと、寛正5年という年は雪舟が45歳でありますから、35歳のころは雪舟は京都にいて、東福寺の坊さんである 之慧鳳といろいろとおつき合いをしておった、ということがわかります。したがって、それから、10年間のある時期に雪舟は山口へ来てるということになるわけですね。非常に懐かしがったんですね。

そして、詩を書いております。その詩をちょっと御紹介をいたしますと、「京洛會つて遊ぶ楊客卿」と「茅を結び、この地に終生を要す」、「喜ぶべし、君の画格、天下に出づ」と「児卒も亦雲谷の名を知る」とこういう詩を書いております。雪舟はこの地に終生を要すと、一生この地に住んでもよいと、こういうふうになっているということが書いてあります。大変雪舟はこの山口が気に入っておったということがよくわかります。そして、その雲谷といえば「児卒」というんですから、子供でも走り使いの下僕でも、雪舟と言えばあの雪舟さんですか、とそういうことを知っておったということになりますと、当時も大分、山口の地になじんで、いろいろと絵をかいておった。かなり山口では有名な人になっておったということがわかるわけなんですね。

さて、そういう山口というところはどういうところであったかということですが、皆様、山口においでになってもう山口の地形をごらんになっていると思いますが、東と北と西が山に囲まれております。南に小郡の方に向かって開けております。その中を 野川という川が瀬戸内海までざっと貫流をしております。そして、この山口という土地は、山陽と山陰を結ぶ2筋の道路が交錯をしておるところでございます。すなわち、一つは防府を通過して山口に入る道と、小郡を通過して山口に入る道があると、さらに一つの道は一の坂を越えて直接萩に抜けて行く道と、それからもう一つは阿武郡の山を分け入って、そして石見益田に抜けて行く道と、この道が交錯をするところ、そこに一つの集落が生まれた。それが山口というところなんです。まあ、いうならば、山に入る入り口の町、集落だということなんです。

実はこの地形が中世の豪族にとってはとてもいい場所であったわけなのでありまして、南北朝時代に大内氏の24代弘世という人がここへ移って来まして、そしてここにまちづくりをしたわけです。弘世は京都に出て行きまして、京都の文化にあこがれ、京都に似せたまちづくりをしようということで、そういう計画のもとに都市計画を進めていったようでございます。

そして、その子供の義弘という25代であります。義弘の時代に大内氏は大変発展をいたします。実はこの義弘が李朝朝鮮と貿易を開いておりますが、応永6年に実は自分は百済の王族である、聖明王の第3子琳聖太子の出であるということを示し出して、朝鮮に対して土地の分譲を申し出ておる。これは、李朝実録という李朝朝鮮の李氏の公の記録にそのことが載ってるわけです。そして、そのことが李氏朝鮮と大内氏との間を絶対的なものにして、朝鮮から最恵国待遇を受けることになるわけです。

そして、その後、大内氏には途中で幾つかの事件がありました。例えば、大内義弘は、足利義満と争って泉州堺で戦死するという出来事もあるし、その後大内盛見や持世の時の家督争いとかいろいろなことがありましたが、しかし大内氏は周防、長門、それから豊前、筑前この4カ国、あるときには石見、そこの守護を代々受け継いでいきまして、発展をしていきました。その発展の基盤になったのは、李朝朝鮮との貿易が非常に大きなウエイトを占めておったということがいえると思います。そして、山口のまちは次第に発展をしていく。

そして、雪舟が山口に来ましたときには、28代の教弘のときであったわけですね。そのときに朝鮮貿易は最盛期を迎えております。今、毛利博物館に朝鮮国から大内氏に送られた勘合符に当たる通信符という印判がございます。それはその印判をついていけば、公な貿易を許してくれるという印判でありまして、これはこちらの豪族としては大内氏が持っているのが唯一のものでございます。

したがって、朝鮮貿易とは非常に有利な貿易が押し進められるということではありますが、それだけでは、大内氏は非常に不自由であった。その経済力を基盤として実は、日明勘合貿易に教弘は乗り出すことになるわけです。御承知のように日明勘合貿易はこれは足利義満のときに始まりますが、日本の国書・日本国王の印をついた・日本の国書を持って中国からもらった勘合符を持って行くわけでありまして、それまでは幕府の船とそれから管領の細川氏の船とそれから大きな社寺の船が行っておったわけでありまして、その中へ実は大内教弘が割って入ることになるわけです。それが一つには勘合貿易船を出すには大変なお金がかかる。その船を準備する準備費を大内氏が貸すというようなことで、それでは自分の船も加えてほしいということで、出ることになるわけです。

そこで、大内船が出るということになった。それをその情報を雪舟は自分の周防出身の京都五山におります僧侶から聞いて、そしてそのついで大内の勘合貿易船に乗って明に渡ろうということで、山口にやって来たのではないかと、こういうふうに言われておりますが、これもはっきりした証拠はもちろんありません。しかし、雪舟の山口に来た理由につ

いては、いろんな方がいろいろ言われておりますが、今のところ、やはり大内船に乗って明に渡りたいということで、大内氏を頼って山口に来たのではないかというのが、一つの伝説のようになっております。

そして、山口に来た雪舟は、雲谷庵で絵をかいて、その機会を待ってあったということだったと思います。もちろん、山口にいる間にかなりの絵をかいているに違いありません。はっきりわかるものも、肖像画やなんかでそうではないかと思われるものもあります。

山口の歴史民俗資料館で雪舟の関係の絵の展覧会が今、これを記念して行われておりますが、その中に出てまいります仁保弘有という人の肖像画は、遣明船の幕府の船に乗った正使である天与清啓の賛を得ると、恐らく雪舟が雲谷庵にいるときにかいてそれに賛を入れたのではないかと思います。しかし、雲谷庵でかかれた渡明前の・・明に渡る前の雪舟の絵というのはなかなか難しい。

皆さんは、先年、大阪の正木美術館というところに拙宗等楊という人のかいた絵があると、そのほか一、二点、雪舟資料として重要文化財の指定になった。そこで拙宗等楊が雪舟になる前の「せっそう」と読むか「せっしゅう」と読むかわかりませんが、「せっしゅう」と読むのがいいのではないかという意見もありますが、これはまだ確定をするまでには至っておりません。

さて、雪舟は大内氏の遣明船が応仁元年に日本を立って行きました。幕府船、細川の船、大内の船、この3船団が行ったわけですが、雪舟の船が運よく一番初めに寧波というところに着きます。幕府の船と細川の船は風に吹かれておくれしてしまいました。そこで、雪舟は寧波の近くの四明の天童山景德寺という禅寺に上がって禅の修行をします。そして、第一座にあがります。これは雪舟、甚だ得意であったようでございます。雪舟は日本における間は、知客という位になるわけでございますね、禅寺の。そこで、楊知客、楊知客と言われたわけでありますが、第一座、しかも中国の第一座、本場の禅寺の第一座になつてということから、大变得意であったというふうに思われます。そして、そこで船が着くのを待っておりました。

ちょっと気が焦りましたので、今までにお話しなきゃならんことを、ちょっと抜かしておりましたので少し前にもどりますが、この雪舟の出自についてでございますが、これは皆さんこれもよく御承知だと思います。ただこれは、はっきりこのことをかいたのは江戸時代の初めごろに、狩野永納が書いた「本朝画史」というものによる以外にはないわけなんです。それを見ますというと、雪舟は備中の生まれであって、小田というところの出であると、これが実は今の総社市になるわけです。そして、その旧跡が田の中にあるということが、書いてございます。私も何度か総社市を訪れまして、雪舟の誕生地に参りました。今、大きな記念碑が田の中に建っております。

そして、それから十二、三歳のころに、井山宝福寺という寺に上がって僧になったということが書いてございます。そして、それに続いて、有名な涙で足の親指でネズミをかいたという、あの有名な話が「本朝画史」に書かれております。今のところ、雪舟の出生に

つについてはそれ以外によりどころにするものがないので、総社市の生まれであるということ、一応定説ということをございましょう。ただ、その宝福寺でネズミをかいだという話は、幾ら何でもちょっとでき過ぎた話ではないかというふうに思われます。有名な絵かきなんかにはよくありがちなことであろうと思います。

そして、雪舟はやはり、若いころに京都に出て行って、そして京都五山の相国寺に入った。そこで春林周藤について禅を学んだ。そして、等楊という諱をつけてもらったと、こういうことをございます。そして、画僧の周文について絵を学んだ。そして、京都でかなりの腕を振るっておったと思われませんが、これまたわかりません。京都における画家としての雪舟の活躍というものは何にも知る事ができません。そうこうするうちに今の内船が出るということで、山口にやって来たということだというふうに思われます。

それで、雪舟は早くは雲谷という号を使っておったようをございます。と申しますのは、先ほど申しました 之慧鳳が山口に来ましたときに、雪舟は慧鳳に頼んで、晦庵という号についての言葉書きを求め、書いてくれということをお願いしております。慧鳳は晦庵序というものを書いて与えております。その中に、慧鳳は雪舟には早くから雲谷という号があったと、そして、大内氏の京都の雑掌である全果ですね。松雲軒全果というものに雲谷記という号についての言葉を書いてもらっておったというふうにございます。したがって、雲谷という号を持っていた。したがって、山口に来たときも、雲谷の名を知るとするのは、「雲谷さん」というふうと呼ばれておったということがわかるわけをございます。

ところが、雪舟は山口におりますときに、中国、元の僧侶である楚石梵琦という人が書いた「雪舟」という大きな字を手に入れました。そこで、この「雪舟」というのを号にしたいということで、龍崗真圭という僧に頼んで、雪舟記という雪舟二大字説ですね、というものを書いてもらいました。これが書かれた時期というのが、実はこの龍崗真圭が鹿苑院に入ります。それが寛正3年に入ってるわけです。したがって、鹿苑院に行ってからということに、寛正3年から応仁元年まで在任しておりますから、その間に雪舟二大字説というものを書いてもらったことになります。そうすると、雪舟が山口にいるときに、その「雪舟」という号をつけたということがわかるわけです。しかし、この雪舟という号を使ったのは、実は中国に渡ってから初めて使っておるようでありまして、渡明前には使った形跡はございせん。

そういうふうに、山口というまちは、その実は朝鮮貿易を通して、中国からのいろんな文物が入ってきておりますし、絵画、あるいはそういう墨跡、そういったものもいろいろ入ってきておったろうと思います。したがって、雪舟にとっては、山口というところはまことに勉強にもなるし、住みよいところであったといつてよいのではないかと思います。

さて、雪舟はいよいよ中国に渡ったわけでありますが、やはり、中国へ渡れば、絵の勉強に行ったわけでありまして、一生懸命で絵の勉強をしました。しかし、雪舟は当時中国にいた画家、長有声とか李在とかいうものについては、何かがつかりしたようなことを書いております。しかし、実際には、「澆墨の法」とかいろんなことをその2人から学んで

おります。それから馬遠とか李唐とかそのほか古典画家についても随分写しをかいいて持って帰っておりますから、かなり勉強したと思います。しかし、何しろやっぱり中国で一番大きな雪舟の画境に影響を与えたのは、あの大自然であったと思われます。中国には絵の先生はいないけれども、大自然が先生であるということを書いております。まさに、中国の大自然に触れたということは、雪舟の画境を飛躍的に進めたことになったと思ひます。中国でもいろんな絵をかいいたようであります。

大分の「天開図画楼記」を書きました呆夫良心は中に、中国での雪舟の行動なり活躍なりをたくさん書いておりますが、有名な話として科挙の試験をやる礼部院中堂に壁画をかいいたということを書いております。

それから、東京の国立博物館に四季の「山水図」が4幅残っておりますが、「日本禅人等楊」ということを書いてこれは中国の所蔵者の印判が押ししてありますから、明らかに中国で書いたものだろうということがわかります。そういうふうな活躍をしてたんですが、やがて、文明元年5月に寧波を立て帰ることになります。そのときに四明の希賢徐璉という文化人が雪舟に充てて送別の詩を書いたすばらしい軸がございます。これは今、現物が毛利博物館に所蔵してありまして、「山水長巻」につけて国宝に指定されております。

さて、帰ってきたわけですが、一旦は山口に帰って来たと思われけるわけです。そこにありますように、文明5年に医者安世永全という人の像をかいいておりますので、山口に一遍は帰って来たと思われます。しかしちょうど、その当時は応仁の乱の最中でありまして、大内政弘は兵を率いて京都に出ていきました。応仁の乱は御承知のように、細川勝元と山名宗全の争いでありますが、大内氏・政弘は山名宗全の方の西軍について、京都で活躍することになります。ところが、文明6年に政弘のおじさんになります・教弘の弟でありますが、教幸という者が細川氏について、山口の地元で反乱を起こします。そういうようなことがあったりしましたので、どうも山口は安住の地でなかったというので、雪舟は九州の大分に去ります。ここは万寿寺という寺で桂庵玄樹が住職をしてあります。桂庵玄樹というのは、雪舟が乗っていった大内船の遣明副使になる人であります。それから、呆夫良心という人も一緒に中国へ同じ船で渡った人で大分にいたわけです。それに恐らく招かれたと思われけるんですが、大分に行きまして、そして、大分の近郊に「天開図画楼」という画室を構えて、そこで画人としての生活を始めるわけです。そこで、呆夫良心が「天開図画楼記」というものを書いているわけです。しかし、そこも安住の地ではなかった。

あの有名な沈墮の滝がかかれたのはそのときだと思われます。大分在住時代だと思ひます。そして、やがて、雪舟は絵筆を持って、筑紫に入り、さらに絵筆を携えて全国行脚に出かけて行きます。それは今この年譜に書いておきましたから、それを見ていただきたいわけでありますが、文明11年には益田に行きまして益田兼堯の像をかいいておりますし、しばらく益田に滞在しましたが、やがて美濃に去り、そしてさらには立山、今の岩手県ですね、立山にも行ったと、いうのは実はこれは山寺の図が残ってるわけです。本物はなくなつたけれども、狩野派がかいいた写しが東京国立博物館に残っておりまして、等楊という角

印が下に押してあります。これは、雪舟の持っていったものかどうか分かりませんが、それによって雪舟がかいたと考えられておるわけでございます。

しかし、これは先ほどからお話がありましたように実は芳井町の重玄寺の裏山、重玄寺山も実はこれは山寺なんだということでもあります。それから、石見益田の大喜庵の裏山も実はこれは山寺であると、これはかなりのしっかりした学者が、重玄寺山についてもこれは山寺であるという論説を書いておられますし、石見益田の大喜庵の裏山も山寺であるということが書いてあります。それからまた雪舟が今の岩手県の立石寺のある山寺まで行ったという証明もないわけでございまして、ちょっとこれ難しいところでござんしょう。これなかなか軍配が上げにくいということになるわかなと思いますが、従来の伝説的なものによれば、山寺まで行ったということになるわけでございまして、やがて、雪舟は山口に帰って来るわけです。それが、文明 16 年でございます。文明 16 年に陶弘護の画像をかいておりますから、文明 16 年に帰ってきたと思われるわけです。そのときはもう応仁の乱は終わっておりますから、大内政弘は「よう帰ってきた」というので、大変手厚く迎えて、そして、雲谷庵に新しくアトリエを建ててやった。以後、雪舟はこの政弘が建ててくれた新しい雲谷庵のアトリエで、水墨画のたくさんの名作をかくことになるわけです。

まず第一に、文明 18 年に雪舟の「山水長巻」という、これは今、毛利博物館が所有しております、世界的な傑作と雪舟芸術の最高峰といわれるものがここで完成をされるわけでございまして、そして、同じ年、雪舟の「山水長巻」が完成するのは 12 月であります、6 月には了庵桂悟がやってまいりました。雲谷庵に対して「天開図画楼」という大分と同じアトリエの名前をつけております、大分の「天開図画楼」が先でありますから、これは後の記ということで、後記ということでつくっております。その中には雲谷庵のことについて、書かれたものがありますが、特に終わりごろのところを見ますと、大事なことがいろいろ書いてございます。それを見ますというと、そこには「賢太守」ですから大内政弘も時々やって来た、そして、そのほか「野客官僚」だから大内の役人とかあるいはいろいろな文化人、そういったものが、踵を接してやって来た、それに対して老人雪舟は「竹椅、蒲団ヲ侶ト為シ、地ヲ掃キ香ヲ装スルコトヲ課ト為ス、花ヲ採リ水ヲ汲ム」とこういうふう書いております。雪舟の悠々とした生活ぶりがうかがえると思われま。

そういうことで、雲谷庵を中心にして作画活動を続けていくわけです。皆さん、雪舟の「山水長巻」をごらんになりました方があろうかと思いますが、これは延々 16 メートルに及ぶ大幅でございます。春、夏、秋、冬、すごい大幅でございます、まさに、絵は中国の風景が主体をなしておりますが、日本的な四季の息吹が感じられるということでありまして、すばらしいものでございます。これは毎年 11 月 1 日から 23 日まで毛利博物館に全巻広げて展示をいたしますので、また、毎年必ず国宝展という展覧会をやり、展示をいたしますから、ごらんになっていただきたいと思ひます。

そして、この雲谷庵であります、今、雪舟の絵の中で国宝に指定されているものが 5 点あります。東京の国立博物館に 2 点ありまして、弟子の宗淵に与えた「破墨山水」、それ

から「秋冬山水」、それから京都の国立博物館にあります「天橋立図」、それからあの倉敷レーヨンで有名な大原さんのお宅にありますこれは雪舟最後の遺作といわれておる「山水図」、それと毛利博物館にあります「四季山水長巻」であります、この5点は全部雲谷庵でかかれたと思われま。まさに、雲谷庵は雪舟が日本水墨画を大成したところであるといつてよいのではないかと思います。

それともう一つ雲谷庵について、重要なことは、たくさんの弟子を育てているということでございます。有名なのは、東の宗淵といひまして、鎌倉の円覚寺の坊さんの宗淵です。西の秋月といひまして、これは薩摩の侍が還俗して弟子入りいたしました秋月です。そのほか、山陽筋、それから近畿もあります、九州各地、そういうところからたくさんの弟子が雲谷庵を尋ねて、雪舟の指導を受けております。私は雪舟がたくさんの弟子を育てたということ、これは非常に大事なことであったと思うんです。また、その弟子たちはみんな雪舟を慕っておりまして、後になって雪舟を知らなくても、雪舟画法を学んだ者は雪舟七世の弟子であるとか雪舟の弟子であるということを落款にかくことを誇りにしておる、そういう姿を見ることが出来ます。そして、雪舟はこの雲谷庵で87歳の生涯を閉じたということになります。

ところが、これまた、レジュメを見ますというと大変なことございまして、さっきあそこで控室で開いておりましたら、芳井町の町長さんが篠原先生のことをおっしゃいまして、私は篠原先生を大変よく存じ上げておるんでございますが、重玄寺で雪舟は死んだと、こういうことございまして。これまた、東福寺誌にも載ってるし間違いはないんだと、大分、町長さんに活を入れられたということございまして、そういうことございまして。それから、石見益田の大喜庵、こども雪舟が亡くなったところであつて、あそこには大喜庵の向かって左隣には雪舟のお墓もございまして。これもなかなか譲ってもらえんじやろうと思ひます。

またこれは、雪舟が山口を去つて益田に行き、そこで死んだということは、長州藩の明倫館の学頭までやった山県周南という人が、雪舟伝を書いてその中にもはっきり書いておるんで困つたことだと思つておるんですが。山県周南が書いてるのにこれはちょっと笑ひ話になつて恐縮なんです、大内氏が絵を中国から買った。それを雪舟に見せた。すばらしいものが手に入ったと、そして、雪舟は一目見て「あつ、これは中国で自分がかいた絵だつた」というのでそのことを言つたと、そうするとそりゃけしからんというので、そんなに物のわからん人は相手にならんというんで去つたと、そして益田に行つたと、こういうことを書いてるんですね。ところがまた、それが後がありまして、屏風が傷んだんで、その屏風をやりかえたら明らかに雪舟の落款が出てきたと、それでこれは大失敗したということで、帰つてくれと言つたけど帰らなかつた、ということですが、それはどうか話でございまして、そういうことを書いておる。

しかし、今のところ雪舟が亡くなりました翌年に了庵桂悟が雲谷庵を訪ねた。そうすると、そこに今大原さんのところにある国宝になっておる遺作の「山水図」があつた。そこ

で、それに追悼の詩を書きつけた。ところが、その詩には雪舟と非常に仲のよかった、雪舟の絵にたくさんの賛を書いているところの牧松がやはり追悼の言葉を書いている。そういうことから、雪舟は雲谷庵で・・・それは雪舟が亡くなった翌年の3月のことですから・・・雪舟は雲谷庵で亡くなったというのが、今大体、学会の一つの伝説になっております。しかし、今、申しますように、芳井町でも益田市でもとてもそりゃ納得できんだろうと思いますんで、私は時々、雪舟さんのお話を申し上げるときには、偉くなれば人間は3カ所で死ぬると、こういうことにしております。

さて、雪舟が亡くなった後、雲谷庵はどうなったかということなんですが、二代目は周徳というのが継いでおります。これは間違いありません。「雲谷庵主周徳」という名文がありますから、これは間違いありません。その次の三代目を等薩というのが継いだというふうにいわれております。これは非常にはっきりとした証拠はありませんが、等薩が継いだということになっております。

ところが、皆さん御承知のように、大内31代の義隆は、陶隆房の反乱によって長門市の湯本の大寧寺で自刃するということになります。そして、隆房が大友氏の太田義鑑のところ、義隆の姉が嫁いで、間にできた晴英というのを迎えて大内氏を継がせました。それが大内義長であります。その義長も、弘治元年にまず陶晴賢が厳島で討たれ、そして、弘治3年に大内義長も長府で毛利氏に討たれた。完全に大内氏は名実ともに滅んでしまったわけです。そうすると、雲谷庵にいた画家たちはパトロンがいなくなったわけで、そこで、遂に無住になってしまった。そして、雲谷庵は荒れるにまかされた。

ところが、元就の孫の輝元が雪舟の画統が絶えるということを非常に残念がって、だれか雪舟の絵をよくするものがないかということで、そのときに、肥前の原治兵衛という者が雪舟画をよくするというので、その原治兵衛に「山水長巻」を貸し与えて写させた。ところが、その写しができあがって、すばらしくよくでき上がっておったので、「よし、お前に雪舟の後、画統を継がしてやろう」ということでその雪舟の旧居であった雲谷庵を与え、同時に雪舟の山水長巻も与えて、そうして、名前を雲谷と改めさせた。そこで、原治兵衛は雲谷等顔と名前を改め、毛利氏に仕えることになったわけです。そして、その後、等顔の子孫が数軒に分かれて、毛利氏に絵筆を持って仕えた。それが、長州の雲谷派という画統であります。その雲谷庵と雪舟の「山水長巻」はずっと雲谷家の本家、宗家が代々受け継いできたわけです。

ところが、明治維新になりまして、雲谷家は全部禄を離れた。もちろん宗家も禄を離れた。そこで、還俗して、原氏を名乗ることになります。原治兵衛だったから原という姓にかえります。そして、せっかくの雲谷庵を民間に売ってしまった。民間の手に渡りましたからそれを買い取った人は畑に開いてしまった。ところがその時に近藤清石という山口県の歴史の編集をやっていた大内氏の研究の大家であります。この方がせっかくの雪舟の遺跡がわからなくなるというのは残念だということで、またそれを買い戻した。そして、大内氏時代のゆかりの古材を集めて新しく雲谷庵をつくった。それが今から100年前であ

りますが、それが現在の雲谷庵であります。

実は、私は雪舟は87歳まで生きて、日本全国を歩いていらっしゃるんですが、明瞭に資料的な裏づけがある、明瞭にここがこれが雪舟の遺跡であるというのは、大変口幅ったいようでございますが、山口でお聞きになるんだからこらえていただきたいと思いますが、雲谷庵だけだと私は思っております。

と申しますのは、この文禄2年に雲谷等顔がそれをもらったときに、そのときの様子をちゃんと書いてるんです。それが、雪舟の賛・・・その中にこういうことを書いてるんです。「防の雪舟老人、旧居雲谷軒を賜ひ、拜してもって眠食の地と為す。老人遺愛の勝境、今なほ、老松怪石、奇花異草、緑水青山、旧容を改めず」と書いてあります。したがって、雲谷等顔が輝元からもらって、雲谷庵に行ったときにはまだ、雪舟が住んでおったときの庭も木もすべてもとのまま、荒れ果ててはおっても、もとのままの姿があったということに書いてあるわけです。

さらに、慶長年間、建仁寺の298世、これは洞春寺の3世であります、溪玄轍という人が書いております。これも今、毛利博物館にあります、それを見ますと、「老禅、西国に在る日、一小軒を築き、雲谷と扁す、旧居今なお存す、大守大江宗瑞公、これを賜ひ雲谷を以て名づす」と、やはり、はっきり雪舟の旧跡とその古いたたずまいがそのまま残っていたということを慶長年間にも書いております。そして、幕末の雲谷家の宗家の等球という人が、幕末の記録の風土注進案というのには、図が書いてありまして、あの山ベリとそれから、雪舟の雲谷庵の敷地とそれから下に二町ほどあります、田が。その田んぼまで図で書きあらわされて、これが、雪舟が住んでおった旧跡であるということが、書き記されております。そのようにして、ずっと受け継がれておるわけです。

そして、昭和57年に山口市の教育委員会で発掘調査をいたしました。もちろん、雲谷庵を解いてやるわけにはいきませんから、トレンチを入れただけでありますが、既にそれでも青磁の破片が一片と、室町時代の瓦器の破片が出ております。室町時代の遺構があるという可能性が極めて高いという報告が出されております。

したがって、現在は山口市の史跡に指定をしておりますが、私は先ほどから申し上げました、これこそ雪舟唯一の遺跡であると思います。

あの山からたらたらと水が流れております。恐らくあの水は雪舟が筆を洗い、あるいは、お茶のために水をとったのではなかろうかと、これはわからんですよ。それはわかりませんが、そう思うのに十分です。雲谷庵に行かれましたら、裏側に回っていただいたら、そういう雰囲気を感じとられるだろうと思います。

ちょうど、1時間というお約束でしたので、ちょうど1時間ぐらいになりました。これで私のお話を終わろうと思います。ちょっと、焦りましたので、ところどころ抜けた、お話ししたいことで抜かしたこともあります。それから、先ほども何遍も申しましたように、「雪舟と山口」ということでいささか手前みそがあったかと思えます。その点、よそからおいでの方、皆さんには多少お聞き苦しかったかもわかりませんが、それはひとつお許しをい

ただきたいと思います。私の話を終わります。御静聴ありがとうございました。(拍手)

河上 康子(司会)

長時間にわたりまして、大変貴重なお話をいただきました。

毛利博物館館長臼杵華臣先生によります雪舟トークでした。どうか皆様、臼杵先生に盛大なる拍手をお送りいただきたいと思います。(拍手)本当にありがとうございました。